

## 穂高への旅―橘 一男を偲んで―

### 悲しい報せ

オーイ、橘、今涸沢についたよ、

お前がこんな山を愛していたとは知らなかった。

お前が結婚したことも、闘病生活を送っていたことも・・・

五月中旬のあるさわやかな昼下がり自宅の郵便ポストに「はがき」が一葉入っていた。

内容は五月九日、肝臓癌で死亡した友人の訃報通知だった。

お葬式を済ませたこと、生前、彼は遺言として「身の整理が着いたならできるだけ早く報せて欲しい」と・・・

その遺言にそって届いた悲しい報せだった。

未亡人のお名前がリユ子さん。始めて知った。

「何でお前が死ななければいけないのか」というのがその時の気持ちだった。

直ちに私は橘 未亡人に手紙を送った。

拝啓、新緑の美しい季節となりました。

この度、突然、奥様から訃報を知らされ慟哭の念にたえません。

お葬式はご家族でお済ましになったとのこと、彼らしい身の引き方であると感じています。遠く紀州の地から「安らかに眠り給へ」とご冥福をお祈り申しあげます。「五反田および四谷」のM産業時

代、その後浜松町のCペトロテック時代、一緒に仕事をしました。

優秀で、上司から信頼され。同僚からは尊敬されていました。

私とは年齢も近く仲の良い友達でした。Tビルの食堂や新橋の場末の酒場でよく酒を飲みました。そうしたことが早世の原因かも、奥那須野、二俣温泉に仲間十人ほどと山菜採りに行ったこと、テニスを教えてもらったこと、ゴルフをしたことなど楽しい思い出が次々浮かんできます。どうか安らかに

お眠りください。

少しではございますが霊前にお供えしてくださいませ。

敬具

橘 リユ子様

平成十八年五月十七日

栗栖 靖

私は定年まであと四年の平成九年四月、故郷に近い大阪の

Cエンジニアリング大阪支社に転勤した。

橘はCペトロテックにいたが会社が第三次早期退職者を募った平成十一年秋頃、彼は退職した。

橘は石油化学に関する知識や技術が豊富で優秀であった。直ぐに別の会社に就職した。

年賀状のやり取りはしていたが私の身内に不幸が重なり

平成十五年以降、音信は途絶えたままだった。

橘が結婚（五十八歳で初婚）したことも癌に侵されていることも知らなかった。

五月二十〇日夜、橘未亡人から電話をいただいた。

夫人 「もしもし橘でございます。夜分恐れ入ります」。

「ご丁寧にお手紙まで添えて送っていただきありがとうございます。」「ご返します」。

栗栖 「どういたしましたして 謹んでお悔やみ申し上げます。びっくりいたしました。橘が結婚していることも癌に侵されていることも知らず元気にいるものと思いき無沙汰してしまつて申し訳ございません」。

夫人

夫人 「どういたしましたして 私達、私が勤めている会社の社長のご紹介で五年前、結婚しましたの」。

（橘はテニスが上手く神宮テニスクラブの会員だった。その社長も会員、テニス仲間だった）

栗栖 「赤ちゃんの泣き声聞こえますがお子様いらつしやるのですか？」。

夫人 「いいえ、先の夫との間にできた娘の子供です。先の夫も平成元年、癌で亡くしました。私は再婚です」。

栗栖

「娘をわが娘のように、孫もたいへん可愛がつてくれました。」「た」。

「私にもたいへん良くしてくれました。やさしい夫でした」。

「生前、橘は三人同じ墓に入ろうねと申していました」。

栗栖 「私は退職後二年、W県経営者協会にお世話になり今は遊ん

でいます」。

「山が好きでW県のマウンテイングクラブ（WMC）に入っていました。今は退会しましたが・・・」。

「徒然に山登りや郷里の名所旧跡を訪ねてその紀行文をホームページ（HP）に作成して遊んでいます」。

『紀州路の万葉集』も作っています。一度、私のHP見てください。短編小説も載せています」。

「あら不思議！ 橘は癌に侵されてから書くことを趣味としてましたの、ペンネームも好きな花から

『ごぜんたちばな』と決め楽しんでおりましたの・・・。」「山も大好きで月一回の割合で行ってました」。

「戒名は 庭球登山物書居士 です」。

「栗栖さんがHPお持ちのこと橘、知ってましたらどんなに喜んでいたかしら非常に残念です」。

「アドレス教えてください」。

「今、アドレス言ってもややこしいですから後で送ります」。

「早く見たいのならヤフーの検索エンジンに『紀州 万葉集』あるいは『大峰山 南奥駈』と入れてください。そうしますと僕のHP出てきます」。

後日、「HP見た」との連絡があった。



(ゴゼンタチバナ)

亜高山帯の林内に生えるミズキ科の多年草。白い4枚の花弁は実はガクで、中央の雄しべと雌しべの小花の集合体の部分が花にあたる。

葉が6枚のものだけに花と実がつく。赤い実はカラタチバナ(百万両)に似ていることから、また白山の主峰、御前峰からその名をとった。

## 遺稿集

九月中旬の金曜日、東京のある出版社から小包が届いた。

開いて見ると「橘 一男遺稿 ごぜんたちばな著作集」だった。

栗栖は一字一句洩らさず丁寧に読んだ。

読み終えると感想を添え礼状をリュ子未亡人に送った。

拝啓、一雨ごとに秋めいてまいりました。

この度、親友「橘 一男遺稿」「ごぜんたちばな著作集」をご送付して頂きありがとうございます。一行一行かみ締めながらゆっくりと読んでいます。

涙が止め処となく出てきます。一項目読み終わると「神宮テニスクラブで

撮影した写真、赤岳の写真、夫人との自宅での写真」を見つめて……

充実したい顔をしています。

奥様も「春の夢みたい」と申されていましたがリュ子様のような素晴らしい伴侶を得、幸せだった五年間の結婚生活が彼の写真の中に表れています。友人としてたいへん嬉しく思います。

リュ子様へ感謝申し上げます。どうか彼との楽しかった思い出を胸に秘めて気丈に生きて下さいませ。

手紙を書き終えて庭をながめていますと「こおろぎが」うるさく泣いています。

僕には悲しく聞こえます。

こおろぎの 流るるように 鳴き継ぐを

ほほえ

友の微笑み 哀れ憫はふ

敬具、

平成十八年九月十五日夜

(追伸) 四十九日満願法要お米券いただいております。

「おりよと行く那須岳」を読んで十年前の五月、橘君らと奥那須野の二俣温泉、大白山へ山菜採りに行きました。共通する那須に不思議な縁を感じました。その時の文書を同封しましたのでお読みください。ご迷惑でなければ電話番号教えてください。

Mail y\_kuriku@nku:~:ne.jp

橘 一男遺稿 「ごぜんたちばな著作集」 目次および内容を  
紹介する。

- 一、 はじめに 橘 リユ子…………… 6
- 二、 ワガ輩ハ癌デアル…………… 11
- 三、 白侘助…………… 17
- 秀吉によって切腹させられた利休の無念さや切腹の理由を考察している。
- 四、 花菖蒲園(神宮内苑)…………… 23
- 菖蒲を鑑賞に訪れた中年女性のたわいない会話  
がリアルに描かれている。
- 五、 危ないゲーム…………… 33
- 宇野鴻一郎、川上宗薫ばりの官能小説。
- 六、 御坂峠から黒岳へ…………… 55
- 峠の茶屋に泊留した井伏鱒二、太宰 治のこと、  
二人が「三ツ峠山」に登ったこと等。
- 七、 吉原 三浦屋…………… 61
- 佐久間象山、井上淳之介(馨)、吉田寅次郎(松陰)、  
勝麟太郎、河井継之助らによる吉原三浦屋での遊  
饗。
- 八、 F・A君に捧げる―大キレット縦走滑落事故に  
ついて…………… 71
- 北ア南岳から北穂縦走中大キレットで遭難した  
友人の足跡と遭難の検証。

九、 金峰山…………… 87

近くの百名山瑞牆山みずがきやまやその時の紀行文。

- 十、 おリユと行く那須岳…………… 95
- 十一、 詩「初冬」…………… 104
- 十二、 詩「外苑の並木道」…………… 106
- 十三、 橘 一男《五年間の山行記録》…………… 108
- 十四、 ジョージ エリオット原作
- 翻訳** サイラスマーナー物語…………… 111
- ※ 作者について
- ※ 序文 登場人物
- ※ 訳者より
- ※ 翻訳原本について(編集者注)
- 十五、 編集者より 御前 真澄…………… 238
- この物語は十九世紀の始めイギリスの片  
田舎を舞台にして流浪の貧しいはた織り  
職人サイラス マーナー(独人男)が雪深  
い道で凍え死んでいる母の腕の中で眠っ  
ていた幼児を救いだし立派な娘に育て上  
げる物語である。訳者も言っているように  
この物語に人間の本质が描かれており、登  
場人物のいろいろな人の口を使って珠玉

の格言が散らばっている。

遺稿集の86ページに平成十三年八月中旬、橋がリユ子さん、娘さんと三人で奥穂に登り頂上で撮影した写真が掲載されている。帰りは涸沢からパノラマコースを通り上高地に下りたらしい。栗栖はむしように穂高に行きたくなった。

## 登行準備

栗栖は五年前から秋の涸沢を計画していた。

一目この美しい紅葉を妻、由美子に見せたかった。特に心地よい音をたてながら清い流れの梓川と明神岳、前穂等穂高連峰を左に見ながら涸沢まで二人で歩きたかった。

毎年、計画するがいざ行く段階で何かハプニングが起こり実行は頓挫してしまう。今年もその現象が発生した。

このままでは何年たっても行けない。悪い慣習を断ち切るためにも行きたかった。

思い切って一人で行くことにした。

横尾や涸沢小屋の連休は混むらしい。

半畳の布団に三ないし四人寝るとのこと。連休は避けた方がいい。エブリサンデイの身、それに単独行のため条件は整っている。

十月五日、インターネットで涸沢の天気予報と紅葉情報を調べた。紅葉は十日前後が最も良い。天気も安定している。

登行日を九日と十二日と決めた。

単独の場合山小屋は予約なしでいい、疲労度を考えると十二日直行でW市に帰ることは無謀なので木曾駒高原別荘地の元会社の山荘に泊まることにした。ここは予約制なので早速申し込みをした。幸い部屋は空いていた。ただちに準備に取りかかった。

## ※ 装備

自在性水筒2<sup>リットル</sup>、チタンコップヘル、ガスバーナー、

洗面用具一式、携帯ガスボンベ、ヘッドランプ、ペンシル型懐中電灯、デジカメ、携帯電話、地図、磁石、メガネ、サングラス、ボールペン、ナイフ、3<sup>リットル</sup>ロープ2<sup>メートル</sup>（靴紐スぺアーや靴底が剥がれた場合用いるために）

手帳、本一冊、携帯電話充電器、デジカメスぺアー電池、チタンアイゼン4本爪、ピッケル。ザックカバー。

## ※ 衣類

雨具、羽毛防寒コート、軽い登山用セーター、ラガーシャツ、赤い目出し帽、登山用ズボン、登山用Tシャツ、抗菌肌着、抗菌パンツ、登山用ソックス2、厚手ソックス2、防寒手袋、手袋、軍手。

## ※ 食料

フランスパン小、アンパン2、チーズ6個、豚汁の素3袋、コーヒ少々、チョコレート、黒飴少々、みかん5個、イカの燻製一袋、ピーナツ一袋、ウイスキー500ml、缶ビール4本。

これらを45〜55リットのリックザックに詰め込んだ。

登山後の衣類については30リットのスタッフ袋に別途詰め込んだ。

皮肉にも連休初日の七日台風18号の影響を受けて中部地方以東の天気は大荒れに暴れまくった。伊豆では釣り船転覆、茨城県日立沖でさんま漁船転覆の海難事故、山では白馬岳で中高年の女性二人死亡、奥穂で四人死亡、御嶽でも一名死亡の遭難事故が発生した。八日朝、もう一度涸沢の紅葉情報と穂高の天気をインターネットで調べた。

#### 【紅葉情報】

昨日の暴風雪で涸沢の紅葉の葉っぱがだいぶ吹っ飛んでしまった。ただし、ヒュッテから直下はこれからが見ごろ。

#### 【涸沢ヒュッテの登山情報】

穂高に向かう登山道の夏道に積雪あり。

涸沢周辺で5cm、稜線は10cmの積雪あり。

涸沢から徳沢に抜ける「屏風パノラマコース」にも積雪あり。

#### 【天気予報】

九日〜十三日の旅行日、登山の間天気は晴

とにかく現地まで行って涸沢ヒュッテ、北穂山荘の従業員と相談して山に登るかどうか決めることにした。

## WMC (W Mountain Club) しゃくなげ会

話は少し横道に逸れるがWMCしゃくなげ会について語りたい。

W市は風向明媚、気候温暖、万葉の昔から歌に詠われている人口四十万人の古い城下町である。

定年後、栗栖は年老いた母の面倒を見るため生まれ故郷に戻った。

「風土記の丘」で知り合ったドクターFを介してWMC事務局長の紹介で平成十六年十二月WMCに入会した。

まだWMCに入会していなかった平成十六年の春、やはり「風土記の丘」で知り合ったオーク氏と吉野蔵王堂から前鬼までの北奥駈三泊四日、その秋、前鬼から熊野本宮までの南奥駈三泊四日を決行した。

南奥駈四日目、水呑金剛分岐で道に迷い玉置神社に引き返し3/4達成したところで中断した。

栗栖はどうしても全コース制覇してみたかった。入会した平成十七年五月十四日から十五日、一泊二日で栗栖がリーダーとなりWMCのメンバー女子八名(平均年齢64歳)と男子七名(平均年齢67歳)総勢十五名で玉置神社から熊野本宮神社まで歩いた。

玉置山、玉置神社はシャクナゲで有名な所である。

もう一週間早ければ美しい花を咲かせていたが今回参加したお姉さん方のように

少し水々しさを失い萎んで

いました。それでもお姉様方

同様最盛期の面影を偲ばせるに

十分な余りある美しさを

放っていました。

それから参加したお姉様方と

それに今回の山行きに参加

できなかったがメンバー全員から

尊敬され慕われているベテランのY・Yさん、

栗栖と趣味、好みが一致（山好き、虎キチ、愛犬家）、ある旅行社

の山旅：☆☆☆☆コース北ア ダイヤモンドコースに二人で参加

したY・Mさんを加えてこれらのお姉さん方を栗栖は勝手に「シヤクナゲのお姉さん」メンバー全員のことを『シヤクナゲクラブ』と

呼ぶようになった。従って栗栖の大好きな花はシヤクナゲである。

ちなみに嫌いな花は紀州の名医華岡青洲が始めて乳癌の摘

出手術に使った麻酔薬の素「チョウセンアサガオ」である。

シヤクナゲクラブの中に美空ひばり、江利チエミ、雪村いづみと同

年輩の「シヤクナゲジャンケン娘」がいる。彼女達は元教師でさしず

めR子さんは美空ひばりでT美さんは江利ちえみ、絵をたしなみ生

け花の師匠、T子さんは雪村いづみである。

「シヤクナゲクラブ」にはW県地方の独特の方言「イケズ（意地の

悪い）」な女はおらず理知的でセンス溢れる女性達ばかりだった。

何故か特に「ジャンケン娘」に魅かれたし興味をもった。

R子さんはいつも話題を提供し先導し他の二人は聞き役に

まわる感じだった。その光景を遠くから見ていると微笑ましか

った。

気があつたせいか月例以外のプライベートな山歩きにも誘

っていただけ藤白神社から有田宮原に至る熊野古道や龍門

山から飯盛山、岩湧山、近くの里山にもよく行った。

彼女達はプライベートな事は多くを語らなかったがT美さ

んの旦那さんは同じ会社の先輩であるしT子さんの義弟は

二年後輩であった。

T子さんの義弟とは二人とも四十数年前の独身時代ドレメ

に通学していたガールフレンド三人と男子数人で生石山に

登ったことがある。それから数年後、義弟は妻子をW市に残

して東京近辺の独身寮に入り本社に単身赴任していた。ある

とき社宅が近かったため独身寮のゴルフ打ちっ放し場で家

内と私は義弟にばったり出会った。「社宅へ遊びに来いよ」

「夕飯でも一緒に食おう」と誘ったことがあった。結局彼は

来なかったがそれから数年後、私が失意のドン底で東北の子

会社から親会社と同じビルの関連会社に転勤して来たとき

彼は親会社で出世していてそして私を赤坂の居酒屋に誘ってくれた。



彼は妻子を残してさびしい思いをしているとき

「家に来ないか」「飯でも食おう」と誘ってくれたのがたいへん嬉しかった。「東京で心温まる声をかけてくれたのは初めてであった」と言い今晩はその恩返しだといって奢ってくれた。柄にもない言葉をおかけお陰でたいへんご馳走になった思い出がある。

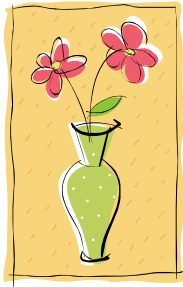
このようにW市はチップケな地方都市であるためどこかに当たると必ず知人、友人の親戚、親、兄弟、遠い姻戚にぶち当たると決して悪いことはできないのである。

他にもK・F子さんは同期生のお実姉さんだし、

M・F子さんも僕の友人の高校でのクラスメイトだった。

平成十七年九月理由あってWMCを退会したときずい分と

慰留に努めてくれたしW市に近いK市のY・Mさんの素敵な邸宅で心温まる送別会を催してくれた。



## 単独登行

十月九日 快晴

八日お昼頃、メル友でもあるS・R子さんとY・M子さんに登山計画書を添付して「穂高に行ってくる」「45年前の7月テントを担いで涸沢↓奥穂↓前穂↓上高地を歩いたことがあるが季節もちがうし初体験に等しい。慎重の上にも慎重に行動する」「シャクナゲ会の皆様によるしく」とのメールを送信した。

その夜、二十時就寝、翌朝二時三十分起床、血圧を三回測定する。

家内は早朝にも関わらず「南高梅の日の丸弁当」を朝食用と昼食用に二つ造ってくれた。

自宅を三時ジャストに出発、四時二十五分大津SAで給油、栗東を過ぎ四時四十五分頃八日市付近でJRAの競走馬輸送車を追い越す。ボディー側面に「フサイチコンコルド」と記されていた。恐らく東京競馬場で秋のG1レースに出場するサラブレッドでも乗っているのだろうか、競馬好きの栗栖は想像するだけで胸がワクワクした。

愛車「マーチ」は快調なエンジン音をたて五時五十二分小牧Jを通過中央自動車道に入る。六時虎溪山PAで朝食をとる。六時三十分出発。

六時五十五分中津川ICを下りて国道19号線を北上、



八時十五分、木祖村藪原で左折奈川村經由、九時十五分「沢渡」に到着した。

駐車場はどこも一杯で少し待ったが運よく空きができて預けることができた。一日五百円、四日分二千円を前払いして九時四十分、シャトルバスに乗り込んだ。上高地まで片道千円だった。十時、上高地バスターミナルに到着した。松本山岳警備隊詰所で登山届を提出、千円で遭難保険にも加入し十時三十分、上高地バスターミナルを出発した。河童橋は観光客で混雑していた。

記念撮影する場所を確保するのに一苦労した。十一時十分、明神館着。十二時、徳沢に到着。徳沢から横尾に向かう途中明神岳が見える河畔でコッヘル、バーナーをリックから取り出し湯を沸かしコーヒー、アンパン二個、デザートにみかん一個を食べて昼食をとる。せせらぎの音と川風が心地よい。

朝食の弁当がたいへん美味かったのでそれと同一の昼食用の弁当は夕食にとつて置いた。横尾山荘は一泊二食で九千円、素泊まりは七千円だったので二千円節約できることが嬉しかった。十四時、横尾山荘到着。直ぐ宿泊手続きをした。素泊まりで火を使う場合、屋外ですること、食事は屋内の喫茶室でしても良いとの説明があった。

七日、八日の連休は談話室も寝床に代わり一枚の布団に二名寝る有様で八百人の宿泊客で賑わっていたらしい。今晚は三百人ほどの宿泊客であった。

十七時に風呂に入り十八時に持参した弁当とトン汁、缶ビールで夕食をとった。夕食後、談話室でくつろぐ。計画書、地図、アイゼンも持たず穂高に登る猛者もいた。

しばらく山の雑誌を開きビールを飲みながら談笑していたが八時、302号室に戻り就寝した。302号室は六人部屋の六人泊まりであった。

#### 十月十日 快晴

昨夜は殆ど眠れなかった。五時起床。

ヘッドランプを点けて屋外のベンチで朝食の支度をする。朝食はカップ一杯と1/3の水を沸かしてこれでコーヒーを作り、チーズ少々とフランスパンをナイフで適当に切り食べるだけだ。

それのみかん一個を付けての簡単なものだ。外の気温は2、3度である。隣のベンチで仕度をしていた二十歳代の女性のペアーはなかなか湯が沸かないと嘆いている。

見るとバーナーの周囲に囲いが無い。登山専用の「バーナー用囲い」を貸してやった。

湯は割合早く沸き彼女達に感謝された。

何故湯が沸かないかその理由を説明してやった。

小学校の理科の授業のようだ。『囲い』をぜひ登山用品専門店で購入するよう彼女達に勧めた。

彼女達も今日は北穂まで行き北穂山荘に泊まるそうだ。しかもアイゼンなしで登るとのこと。栗栖は北穂に登ることを躊躇していたが天気もいいしこの時点で登ることに決心がついた。

空がだんだん明るくなってきた。朝焼けの前穂が美しい!!

早速デジカメでその景色を撮影した。

五時五十五分山荘を発って梓川を左に見て平坦な林の中の道を進む。

二十分位歩いたところから少し傾斜がきつくなってきた。

左手に屏風岩が黒いシルエットを残して突立って居る。冠雪と紅葉の穂高も見えるようになった。

本谷橋六時五十分到着、十分ほど休憩して涸沢に向かう。傾斜も急にきつくなり道もガレ石や尖ったゴロゴロ石が多くて歩き難い。





九時恋いあこがれていた涸沢に着いた。  
橘亡き後、リユ子未亡人が彼の遺品を整理していたとき、  
山のガイドブック裏表紙に「辞世の歌」を書き記しているの  
を発見した。それは

いざ行かん 永久とわの旅路へ朝の露

我待つ山の 御前橘

だった。

栗栖は直ぐ冠雪とナナカマドやダケカンバの紅葉で美しい  
山（穂高）に向かって橘が大好きだったビールとウイスキー  
を一滴そそいだ。「橘、涸沢についたよ」お前の「我待つ山」  
とは「この穂高に違いない」「安らかに眠れよ」「俺の行く末  
を見守って欲くれ」と祈った。勿論、リックのシークレット  
ボックスに大切にしまい込んでいた

「遺稿集 ごぜんたちばな」を取り出し、雲一つもない紺碧  
の空にかざした。

もう一度「橘、来たよ、安らかに眠れ」と祈った。

「辞世の歌」への返礼として栗栖は

いざこひし 永久とわの契りの友なれど

彼待つ山の 峰の白雪

と詠んだ。

一杯八百円の涸沢ラーメンと少々のフランスパンで腹ごし

らえをしていよいよ北穂への登山に挑戦した。

涸沢ヒュッテの標高は二三〇九m、北穂は三二〇六mで

約八〇〇mの標高差がある。ヒュッテからながめるとまるで壁のよう  
に立ちはだかっている。

九時四十分涸沢小屋右手の北穂沢から登り始める。休み休み高度を  
上げハイマツ帯を抜け大岩が重なり合っているゴーロに出る。岩ゴ  
ロの道は岩に印された白いペンキの↑、○を目印に進む。南稜取付  
きのクサリ場目指し左手に斜上する。鎖と梯子を上りきった南稜で  
アイゼンを装着してしばらく休憩する。リックを担ぎ立ち上がると  
軽いめまいがして吐き気がして息苦しい。少し頭も痛いような気が  
する。軽い高山病にかかった気がした。注意深く慎重に休憩を多く  
取ながら登って行く。ここから北穂の小屋までこの状態ではあと二  
時間はかかるであろうと思った。中年の男子三人のパーティに追い  
越された。最後の人は自分も軽い高山病でバテ気味であると言った。  
ヤツトの思いで涸沢槍、奥穂への分岐、南稜分岐にたどり着いた。  
もうここまで来れば北穂ももう直ぐだ。しかしこれからが最も危険  
な場所なので急ぐことなく注意深く歩いた。

二時二十分、北穂の頂上に着いた。標準タイムは三時間であったが  
四時間四十分もかかっていた。追い越されたパーティのバテ気味で  
あった男が握手を求めてきた。栗栖は喜んで握手をかわした。

雲一つない晴天である。北に目をやると槍がすぐ目の前だ、槍の右  
遠方に針ノ木岳、旭岳、白馬岳や鹿島槍が、槍の左遠方には赤牛岳、  
水晶岳、鷲羽岳、黒部五郎岳、薬師岳、南すぐ前に奥穂、前穂が

東に転ずると常念、大天井、燕の表銀座コース、西に転じる  
と笠ヶ岳。

素晴らしいながめだ。苦勞して登ってきた甲斐があった。



十月十一日 ミヅレ、雪、雨

昨夜から今朝にかけて男子24名女子6名計30名の客が泊まっていた。横尾山荘屋外で「バーナー囲い」を貸してやった女性達も宿泊していた。中には愛知県の23歳の独身女性で十日は槍ヶ岳山荘に泊まり大喰岳↓中岳↓南岳↓大キレットをアイゼンも無しに単独行で登ってきた可愛い顔をした猛女もいた。何回も「もう駄目だ、死ぬ」と思ったそうだ。「三点支持」の基本を守り「必死で登ってきた」といつていた。その割には涼しい顔をしている。話を聞いているだけで寒気がした。宿泊客30名の中で自分が最も「体力、経験、技術に乏しいなあ」と思った。

私の宿泊室は二階の「ノルダーカンテ」という粹な名前の二人部屋だった。気を利かして隣にも布団を敷いてやったが宿泊客が来ず一人で独占することができた。

四時ごろ目を覚ますと雨の音がする。山の天気は変わりやすい。昨日はあんなにいいお天気だったのに今日は雨だ。

五時起床、ミヅレ混じりの雨に変わった。六時頃、一旦雨も止みガスも飛び槍始め北アルプスの山々が見えたが長くは続かなかった。又ミヅレ混じりの雨その後雪に変わった。

栗栖は今日、北穂から涸沢槍↓奥穂↓涸沢のルートで涸沢ヒュツテに泊まる予定であったが自分の体調や天候のことを考え予定を変更してもう一泊お世話になることにした。30人中連泊したのは自分一人だけだった。

山の朝は早いと十月になると小屋で働いている人も五時起床らしい。

六時三十分、昨夜泊っていた30名全員一斉に朝食をいただく。三〇〇mの早朝の道は凍結しているため概して出発が遅い。それでもベテラン達は朝食後直ぐ出発した。大方の人は涸沢に直接降りるらしいが昨夜かなり酒に酔っていた男子三人のパーティは涸沢槍↓奥穂↓涸沢のルートを歩いて今日は涸沢ヒュツテに泊まるとのこと。ガスとミヅレ混じりの雨の中カツパを着て出発した。八時になると客は私一人となり心細くなってきた。雨、雪が降っている。今夜の客は来るのかと心配になってきた。

小屋の従業員は男子四人と二十代後半か三十代始めの若い女性二人の六人だった。男女従業員とも感じがよく物静かでそれでいてよく気がついた。彼らの動きに興味をもって食堂の椅子に座り観察する。朝食の後片付けと厨房の掃除を終えると手分けして二階、三階の寝室の掃除と寝具の整理、整頓、準備をする係りの人、男女二人のペアーは食堂の担当だ。テーブルに椅子を上げ、壁の絵画を外し丁寧に掃き清め拭き掃除をする。

その働き具合からいかに小屋を愛しているかがよくわかる。男性二人は便所と便所奥の乾燥室の掃除を行い、ボイラー、発電機、貯水槽の点検等メンテを担当している。

この小屋の物静かで心根のやさしい従業員(男)達も登山者

が山で遭難した場合プロの登山家として探索に加わることが義務付けられている。一日の日は五万円だそう。従って20人で5日捜索してもらおうと五百万円ということである。くれぐれも高い山に登る場合注意と慎重が必要である。

## 北穂高山荘

前述したように八時には客は栗栖一人だけになった。

北穂山荘は頂上まで一、二分の三〇〇mの絶壁の上に建つ小屋である。天気がよければベランダからの景色が素晴らしい。九時頃雨は一旦止み窓を通して正面に右から常念、東天井、大天井、斜め前方に槍が見える。それもしばらくの間で又ミズレ混じりの雨となった。

洩間によると先代のオーナーは北アを題材に描く著名な画家とのこと現オーナーは息子さんでバイオリニストだそうです。

小屋の雰囲気がとてもいい。窓際の席にすわりテーブルに

橘 一男遺稿「ごぜんたちばな」、  
「絵はがき」数枚と「ボールペン」を置いて熱いコーヒーを

一人静かに飲む。バックグラウンドミュージックはチャイコフスキー



のバイオリン協奏曲である。飲み終えたところで遺稿集の詩を何度も何度も繰り返し返して読む。絵はがきも書いた。まず橘 リユ子未亡人に、熊野古道同好会の五人に、臨場感溢れるこの雰囲気山好きなWMCのシャクナゲ娘全員に出したいがそれでは絵はがき代、切手代、書く労力も馬鹿にならない。後で「誰々に出して私にはくれなかった」と嫉まれるのも嫌だ。少し悩んだすえ会を代表して皆ながら敬愛されているY・Yさんにだけ出すことにした。

橘 一男未亡人への「絵はがき」

橘を偲んで秋の上高地、涸沢、穂高を訪れています。昨日は涸沢にて彼が好きだったウイスキーとビールを山(穂高)に向かって一献捧げました。明日は橘とリユ子様、が歩いた思い出のコース「屏風パノラマコース」を通って上高地へ下ります。写真出来上がりしましたらお送りします。

十月十一日 北穂山荘にて 栗栖

十時三十分頃一番早い組が登って来た。年は四十代、屈強な男性四人組み、言葉の訛りから『大阪の人』みたいだ。私はW市ですがみなさんは「大阪」ですかと尋ねた。

「そうだ」と応えた。その中の一人はW県H市出身で親しみ

が湧いた。彼らはラーメンをすすするなり雨の中、足早に又澗沢に下りていった。現役は辛い。制約された日程の中で最大限の成果を求めて行動しているらしい。雨で周囲の景色が見えないのが可哀そうだ。

次に55歳位の背は低いががっしりした体躯でいつも怒っているような顔をした男が、そのすぐ後に新潟県柏崎出身のN青年が小屋に到着した。

彼らが宿泊手続きを終えた後、栗栖も今日の宿泊手続きをした。

昨日、一泊二食、八千五百円であったが二泊目は七千五百円で千円安かった。昨日同様部屋は「ノルダークンテ」と思い込んでいたがその隣の「ローテルグラード」だった。

彼らは二階の部屋で着替えてこざっぱりした服装で濡れたカッパやスパッツ、ザックカバーを持って下りてきた。そして別棟便所奥の乾燥室に行った。食堂に戻ってくるなり二人は夫々一本千五百円の小瓶のワインを買い美味そうに飲んだ。

栗栖は体格ががっしりしていて怒っているような顔をした男にどちらから来たのか尋ねた。彼は「山口県から」と応えた。彼はアイゼンなしで登って来たが相当山を経験している山男の風格がただよっていた。

栗栖は「新首相 安倍晋三の山口県ですか。山口県は首相の最も輩出している県ですね」とお世辞をいった。

男は怒った顔で「俺は安倍晋三が嫌いだ」といった。それ以後その男とは口を訊かなかった。

本格的な一眼レフのカメラと三脚を持った中高年夫婦

二組の四人のパーティも到着した。山口県の男も柏崎の青年もワインを美味しそうに飲む。栗栖もいたたまらなくな

ってウイスキーを取りに二階に走った。二階、三階の低い天井に頭を思い切りゴツーンとぶつ突けて戻ってきた。

ウイスキーはまだペットボトルに二百五十ml位残っていた。N青年はすでにワインを飲み干していた。彼は相当イケル口

だ。栗栖は青年にウイスキーをすすめた。二人は濃い目のホットウイスキーを作りイカの燻製やチーズ、サラミを肴にし

て飲んだ。ウイスキーは瞬く間に空になった。いい気分になったところで昼食を注文せず二階の自部屋「ローテルグラー

ド」に戻って昼寝をした。

階下の食堂が騒々しいので午後二時頃目を覚ました。

食堂に行ってみると福岡県の山岳クラブに所属する63歳のM氏と高校柔道部二年後輩というTマリン(株)社長の

N氏の二人が生ビールを飲んでいた。

九州男児は豪快で楽しい。

ビールを立て続けに二杯飲んで「焼酎はないか」と小屋の女の子に尋ねた。「置いておりません。酒ならあります」と

「じゃあ、熱燗で」美味しそうに飲む。

N社長は山以外に海釣を趣味としそれも超大物をねらっている。まるで話を聴いていると仕事を放ったらかして取り組んでいるようだ。人柄や発言、態度からこういう会社は意外

と従業員とうまくいって儲かっている感じがした。

壱岐、対馬の対馬海峡へ黒鮪を追って出かけるそう。

競馬と同じで始めてすぐ大穴(大物)を仕留めたそう。

50kgの大物だった。それから病み付きになり船頭から情報

(電話、ファックス)が入ると居ても立っても居られず出かけるそう。

かたくち鯛の餌を撒き大きな針にトビウオや鱈を付け、竿を四本位漁船に取り付けて玄界灘の海を引っ張って走るそう。

電動リールも一個三十万円、竿も高価なものになると何十何万円もするそう。餌や漁船のチャーター代だって高いだろう。話を聞いていて趣味というよりたいへんな道楽だと思った。

ある時、八時間格闘してもう少しで釣り上げる寸前糸を切られて逃がしてしまったそう。引き具合から100kgを越す大物だといって悔しがっていました。彼の夢は100K、200Kの本鮪を釣り上げそれを博多の市場に売って従業員や友人とドンチャン騒ぎをしたいといっていた。

彼ら二人は明日、恐怖の大キレットを下り槍に向かうそう。

8ミリのロープ、エイト環、カタビラ、アイゼンも持っていた。

釣りと共通するのロープテクニクも相当な腕前みたいである。ボーライン(もやい結び)、ダブル・フィッシャーマンズ・ノット

(二重テグス結び)とかフィギア・エイト・ノット(8の字結び)とかいって柏崎のN青年と話していた。

栗栖は半場自分の我まままでWMCを辞めてしまったことを後悔し

た。ベテラン達に教えてもらえたし沢登りにも連れていってもらえて結びや高等技術を習得できたのに、これから東京でも、大阪でもインターネットを見て初心者講習会を探し独学とで勉強せねばならない。

山小屋の食事は美味しい。今は科学の時代、食料品はヘリコプターで定期的に来るらしい。新鮮なキャベツだってほうれん草だってある。昨夜の夕食は豚肉のソテーそれにキャベツの千切りとプチトマトが添えられていた。それに「人参、ゴボウ、小芋、豚の角煮の煮物」他に一品付いていた。ご飯と味噌汁は食べ放題、飲み放題である。今日の泊りは男子十二名と女子三名である。

十四人に対しては昨夕のメニューと同じであったが栗栖には夕食も翌日の朝食も特別メニューでたいへん美味しかった。何より新鮮な野菜の多いのに驚いた。

二十時に就寝、二十四時、別棟の便所に行くため屋外に出た。ペランダから下界を見ると東南に松本市の灯が北東に

長野市街の灯が見えた。キラキラ輝いて美しい。

月明かりに照らされた白黒の槍のシルエットがたまらない。その方向に北斗七星が輝いている。ヒシヤクの先を五倍伸ばすと北極星が光っていた。

星があまりにも美しいので秋の代表的な星座。ペガサスを見たくて頂上まで登ってみる。

奥穂高の空高く南に四つの星が四角形に並んでいる



こんな美しい清涼なベガス座を見たことがない。

ギリシャ神話によると、ベガス座は勇者ペルウスによって

怪女メドウサが首を切り落とされた時その血が浸み込んだ所から  
生まれてきた天馬だ。

きっと「サンデーサイレンス」や「スズカサイレンス」もその側で

眠っているに違いない。

これで明日の天気は保障されたようなものだ!!

十月十二日 快晴

五時起床、思っていた通り快晴だ!!

防寒服を着てご来光を見るため頂上に出る。

三脚にカメラを据え付けて本格的に写真を撮ろうと待ち構えている三人がいた。栗栖のように小型のデジカメで撮影する者が五、六人いる。空は段々、茜色とブルーの色に変化してきた。

南東の空に日本のシンボル富士がその右隣に甲斐駒ヶ岳、V字の谷を挟んで北岳が、間ノ岳が、南アルプス連峰が雲海の上にたなびいている。富士の左、東方向には八ヶ岳が、その左はるか遠方に浅間山が見える。

反対に方向を変えてみると槍ヶ岳と北鎌尾根独標が直ぐ前だ。その遠方右に右から針ノ木岳、旭岳、白馬岳、鹿島槍と続く。



槍ヶ岳の左遠方には左から赤牛岳、昨年の夏歩いた水晶岳、鷲羽岳、薬師岳が見える。薬師の前に黒部五郎も見える。

西に目を移すと笠ヶ岳が、南西直ぐ目の前に奥穂が、吊り尾根を介し前穂が大きな山塊を突き出している。

五時五十分頃、八ヶ岳の稜線が赤く染まってきた。大きな太陽が昇り始めた。ご来光だ!!頂上に六時二十分頃までいて日本の代表的な山々の景色を思う存分見ることができた。気温が低いのでデジカメ電池の容量が少なくなり動きが悪い。そろそろ朝食なので小屋に戻った。

朝食後帰り仕度をする。二日間お世話になった北穂山荘の小屋ともお別れだ。記念にライトブルーと淡いオレンジ色の北穂高小屋のバندانを由美子と自分用に買った。

十日、無我夢中で登って来たが下りるのに恐怖を感じる。

とにかく氷の解けるのを待つて遅く出発しよう。

七時五十分、小屋の従業員にお礼を述べ福岡のMさんやNさんと挨拶を交わし小屋を出発する。

頂上で二、三枚写真を撮りアイゼンを装着する。慎重を期して夫婦二組のパーティーにお願いしてその後を歩く。特に松濤岩、南稜分岐までは危険だ!!

どこかで遭難したのかそれとも遭難者がいないか目的は搜索なのか青い空にヘリコプターが飛んでいる。嫌な音だ。

最も危険な下りは尻セードして下りる。

南稜テラスで夫婦のパーティーはコーヒータイクを取る。

ここでアイゼンを外し彼らに別れを告げて一人で下りる。南稜の取付き鎖場や梯子も無事通過、大岩が累々としたゴロを慎重に下りる。この辺りで左足の膝を痛めた。騙し騙しゆつくりと下りる。ハイマツ帯に入った。眼下に涸沢小屋や涸沢ヒュッテの赤い屋根が、山々の紅葉も美しい。高度は涸沢より三百米位上らしい。ここまで来れば一安心。

栗栖は立ち止まってザイテングラードに向かって

「橋、橋、橋」と大きな声で叫んだ。

十一時五十分涸沢ヒュッテに到着した。北穂から涸沢までの下りの標準タイムは二時間であるが倍の四時間もかかってしまった。ヒュッテのベランダで新雪の穂高とカールの紅葉を眺めながらその景色を心に焼付け美味い生ビールをおでんと一緒に「ググット」飲む。

カレーライスも食べた。

二時間もロスしてしまった。本来ならば屏風ノ頭に立ち寄り橋がリユ子夫人、お嬢さんと歩いたパノラマコースを通って新村橋、徳沢から上高地へ下りる予定であったが人通りも少ないし、膝を痛めているし、時間的に余裕もないし、第一、橋がリユ子さんとランレビューした道を一人で歩くことにジュラシーを感じるし自分も由美子と歩きたかったので次回に廻すことにした。

十二時二十分、涸沢を発ち十日登って来た道に戻る。

涸沢より下の紅葉は二日前より進んでいてよりきれいだ。

紅葉したナナカマドの木を右隅に中央に常念岳を入れた  
アングルで写真を撮る。



本谷橋手前の急坂の下りで昨夜、北穂山荘で同宿だった別の  
福岡の二人連れに追い越された。「相当膝がやられています  
ね」「後ろから見ていて痛々しい」といわれた。

追い越された後、彼らは本谷橋で長く休憩をとっていた。  
彼らは今日、上高地で宿泊する予定である。

十四時十五分、本谷橋通過、

本谷橋と横尾の中間位で男は五十五歳、女は四十五歳位の  
三重県鈴鹿市から来たアベックに追い越された。彼らは健脚  
である。やはり「ずい分膝が痛そうですね」「その脚では六  
時三十分の最終バスには間に合いませんよ」といわれた。

道も平坦になってきたし歩き易くなってきた。ピッチを速め  
て歩くことにした。十五時横尾に到着、四、五分休憩して徳  
沢に向かった。

鈴鹿のアベックは横尾で長時間休憩していたのか徳沢へ向  
かう途中で又追いつかれた。ここからは離れず付いて行った。  
徳沢十五時五十分通過、明神館に行く途中知らぬ間に一名加  
わっていた。彼も五十五歳位でパノラマコースを通過して下り  
てきたという、

仕事の関係上、今夜中に東京へ帰るとのことだった。四人で  
話しながら上高地に向かうことにした。

明神館、十六時四十分通過、十七時二十分上高地に到着した。  
辺りはすっかり薄暗くなっていて山へ登る時あんなに混雑  
していた河童橋には観光客の人影もなく我々四人だった。

静寂のなか梓川の水だけがザワザワと音をたてて流れていた。  
河童橋から穂高を振り返ると稜線がピンク色に染まり美しかった。  
さらば穂高よ!!

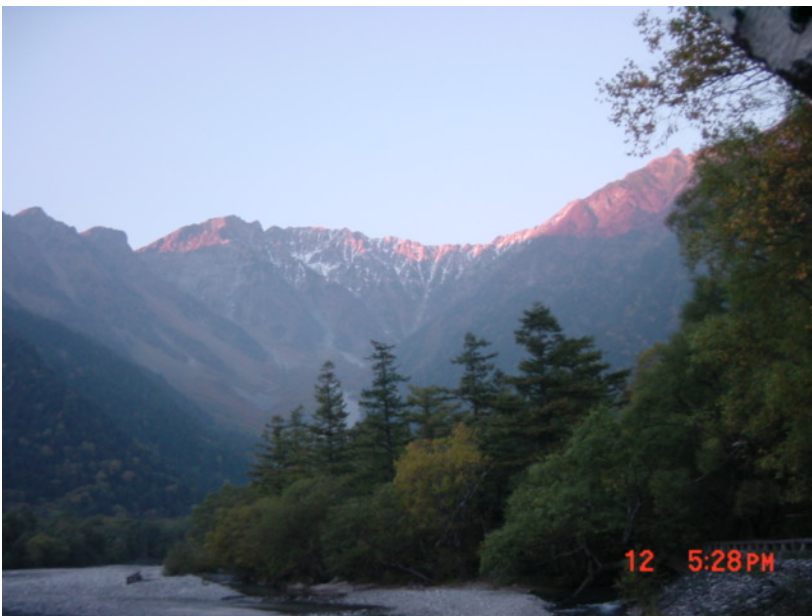
See you again.

親友「橋 一男」を弔うことが出来たいい旅だった。 (完)

(後記) 四人相乗りタクシーで沢渡の駐車場へ、

十九時十分きそこま山荘着。(泊)

十三日(快晴)九時三十分出発、十五時三十分W市に帰る。



(附記)

橘 一男遺稿

ごぜんたちばな著作集 抜粋

ご遺族ならびに編集者の許可を得て「ごぜんたちばな著作集」の一部全文を掲載しました。名前は実名ではなく小説名としました。

はじめに

夫橘は生前折々に文章を書くことを楽しみとし、ペンネームを好きな花からとって『ごぜんたちばな』と決め、いつか小冊子にでもなればとの願望を抱いて御前さんに原稿を送っていました。それがこの本の形となりました。生前、橘と親しくしていただいた皆様にご一読いただければ嬉しく存じます。

橘に始めて会ったのは平成十三年二月、それから本年五月九日に亡くなるまで五年二ヶ月余でしたが、思い返せば、ただ春の夜の夢のごとです。

縁があるというのは不思議なもので、私の勤め先であった(株)MユニパックM氏のご紹介で神宮クラブへ私が出向き、お見合いしたのです。

M氏は橘に対しても、今度神宮に連れてくるから会ってほ

しい、と何度も懇請してくれたようです。橘も私もその時は結婚する気はありませんでしたが、結局結婚に至ったことは皆さまご承知のとおりです。この縁を作ってくださったM氏にこの場をお借りしお礼申し上げます。

始めの二年余りは毎月のように山へ行きました。ところが平成十五年胃ガンと診断され、翌十二月に手術となりました。その時すでに肝臓にも転移しておりました。しかし体力が回復するとともにまた近くの野山を歩き、テニスも時々はできるようになりました。

平成十七年夏あたりから体調が思わしくなくなり、横になっっている時間が多くなって、それまで精力的に取り組んでいた文筆活動もぐんと減りました。

今年に入ってからはいっそう体調が悪化しました。もうこのころは自分の人生を淡々と受け止めているように感じました。

橘の今年の手帳の末尾のページに昨年の暮れに書いたと思われる

枯葉舞い きょうもさまよう 分水嶺

四月のページには

いざ行かん

永久の旅路の朝の露

ちぎれる雲を惜しみつつ

我待つ山の御前橘

の歌がありました。「辞世の句だよ」と言っていたものです。

橘が亡くなったあとにこれを見つけ、涙がとまりませんでした。

M学院の卒業アルバムの卒業生写真に添えたことばに

「サフランの花が好き」とありました。

テニスを愛し、花を愛した橘のためか、本来十二月末頃に咲く「侘び助」の花が今年は四月に四輪も狂い咲きました。

私が「カズさん、侘び助が咲いている」というと、

橘は「そうだな」と言っただけで眺め入っていました。同じ頃、ペランダの黄色のジャスミンがこんなに咲いたのを見たことがないと言うほど咲きあふれました。

この本を通して皆さまに橘を思い出していただければ幸いです。

平成十八年九月

橘  
リユ子

吾輩ハ癌デアル

吾輩ハ癌デアル。

今ノ主人ニ取り憑イテ三年ニナル。

名前ハ始メ、胃癌ト呼バレタガ、今ハ肝臓癌ト呼バレテイル。

吾輩ガ発見サレ、告知サレルト、主人ト細君ハ驚キ、主人ハ遺

言ニ、細君ハ遺産相続ノ調ベニ走り回り、

吾輩ノ存在ハ重要視サレタノデアル。

抑モ、吾輩ガ主人ニ取り憑イタ謂レハ、主人ノ不摂生ニ因ル。

夜遅クマデノ飲酒、タバコ、遅イ食事、睡眠不足、精神不安、

イズレモ吾輩ニハ好条件デアル。

最初、吾輩ハ長イ期間ヲカケテ主人ノ胃壁ニ取り憑キ、

深く静カニ子孫ヲ増ヤシテイタガ、主人ガ気ガツク前ニ、

健康診断トヤラデ見ツケラレテシマッタ。

ソシテ結果的ニ吾輩ノ周囲ノ三分ノ二ガ切除サレ、

吾輩ノ存在モ「コレマデ」ト思ワレタガ、

幸ワイナルカ吾輩ノ子孫ガ肝臓ニ乗り移ッテクレタ。

ココハ切除サレナイ安楽ノ場所デアルガ、吾輩ノ嫌イナ薬物ガ

投入サレ、マタ主人ノ生活態度モ改マツテ、住ミ難イ環境ニナ

ツテイル。

シカシ、吾輩ハ本来的ニ人間細胞ノ異性体デアルカラシテ、年齢ニ関係ナク人間ノアラユル臓器―胃、腸、肝臓、肺等―ノミナラズ女性器ノ子宮、乳房、男性器ノ前立腺カラ筋肉部マデ取り憑イテ、仲間ヲ増殖スルコトガデキル。

マタ、一度取り憑クト、血液ヤ、リンパ腺ニ潜リ込ンデ他ノ臓器ヘ乗り移ルコトガデキルノデ、甚ダ厄介者ト思ワレテイル。

昔ハ吾輩ノ存在ハ余リ注目サレナカッタガ、人間社会ノ進歩ト共ニ環境ガ變ワリ、人間ノ生活様式モ變化シテキテ、生活習慣病トモ呼バレルコトガアル。

第一ニ、食物ニツイテハ、昔ハ今ホド化合物ガ使ワレテナカッタ。

肥料、殺虫剂等ノ農薬、或イハ洗剤、又添加物ニシテモ、防腐剤、漂白剤、

着色剤、増量剤、香料、調味料・・・。

第二ニ、食器類ヲ含メタ日用品ハ、石油化学製品ニ満チ溢レテイテ、コレラハ加熱ニヨツテ僅カニ溶ケ出ス。

一度ノ摂取量ハ微量デアロウガ、毎日毎回ノコトデアアル。

コレラノ中デ何ガ吾輩ノ異性体化ヲ促スノカ、吾輩自身ヨク解ツテナイ。

一番大キナ變化ハ、人間ノ生活様式デアロウ。

兎ニ角、二十四時間ノサイクルデ不規則ニ活動シ、

ソノ間ニ、酒、タバコ、食事、睡眠ガトラレル。

斯様ナ環境下デ、吾輩ハ主人ニ取り憑イタノデアアル。

コレカラ後モ、吾輩ハ子孫モ仲間モ増ヤシタイト希望スル。

主人ハ吾輩ヲ抹殺シタイト思ウダロウ。

シカシ、直チニ吾輩ヲ抹殺スルコトハ、

主人自身ヲモ抹殺スルコトニナル。

吾輩ノ嫌イナ薬ガ投入サレルト、吾輩ハ悶エ苦シムガ、

同類デアルガ故ニ主人モ苦ルシイ筈デアアル。

コレハ相反スルコトダカラ闘イデアアル。

五年以上ドチラカガ生存スルカトイウ意味ノ

五年生存率ナル指数ガアルラシイ。

コレハ吾輩ニモ同ジク云エルコトデ、

五年後モ吾輩ノ子孫モ仲間モ生キ残ツテモライタイ。

ソコデ吾輩ハココ暫クハ共存ヲ望ム。

ソシテ最終的ニ、吾輩ノ仲間ト子孫ガ主人ヲ支配スルコトヲ

企テテイル。

(平成16年5月15日)

憑ク 抑モ 謂レハ 因ル 斯様ナ 悶エ

暫ク

## 初冬

一  
うつりすんでの、かまがやへ、  
にもそのままだに、こがらしを、  
にわのさざんか、いろいろいて、  
まどのわびすけ、はなひらく。

二  
わびすけの、  
しろいはなびら、きよけれど、  
おちるすがたは、かなしくて、  
ひとのいのちも、かくやありなん。

三  
しかれども、  
かならず、めぐるきせつには、  
しきのはなばな、さききそい、  
いのちのいぶき、めでるたのしさ。

四  
やまのおちばは、かさこそと、  
まといつくおと、こちよく、  
ふじをながめつ、ひだまりを、  
ぶじをねがいつ、われはいく

## 外苑の並木道

一  
なんじやもんじやの咲く頃に  
初めて会った野球場  
気にも止めずに時が過ぎ  
再び会った並木道

二  
夏の夜空に咲く花火  
ライトに浮かぶ絵画館  
あなたがくれた接吻で  
かすんで見えた水しぶき

三  
友だちに囲まれて  
二人が誓う記念館  
白いスーツがまぶしくて  
銀杏並木も黄金色

四  
雪に舞う日はこどもらが  
雪を投げ合う遊園地  
二人静かに行く道は  
いつも変わらぬ並木道

(平成16年12月10日)

(平成17年9月12日)



## 訳者より 「サイラス マーナー物語」の時代背景

「サイラス マーナー物語」は今から約200年前の19世紀始めのイギリスの片田舎が舞台になっていますが、この頃イギリスは海外の植民地政策を進め、国内では産業革命と近代化の波が押し寄せ、大英帝国繁栄の花が開き始める時代にあたります。

それ以前に16世紀始めにドイツで起きた宗教革命は欧州各国に広まり、イギリスでは全く別の形で表れました。それは当時の国王の離婚問題を契機としてローマカトリックと決別し、英国国教会を創立したことです。この時、「清廉な」教会を要求するグループが発生しました。このグループはピューリタンと呼ばれ、彼らの信条（清廉、誠実、勤勉、儉約、中庸）が国民性にあつたのか勢力を伸ばしていきましたが、カトリック教徒を基礎とする国教会派の迫害をうけ、彼らの一部は17世紀の始め、オランダへ逃れ、新天地アメリカへ移住し、

アメリカ独立の礎となったのです。国教会派は国の保護を受け、貴族、大地主、司教などの特権階級に浸透する一方、中、下級層ではピューリタンはますます勢力をのばしていき、迫害されながらも、17世紀中頃にピューリタン革命を起こし、これ以後、英国国教会はピューリタンが占めることになりました。

18世紀後半にはアメリカの独立、そしてフランス革命が起き、ナポレオンが欧州の王制を打破し、ナシヨナリズムを根づかせたのですがイギリスの遠征には失敗し、現在に至っています。

又、19世紀に入ると、イギリスはアイルランドを併合し、独立したアメリカはモンロー主義と称して国土の拡大と、内政の充実を図りました。そして、19世紀中頃に起きたアイルランドの大飢饉でたくさんのアイルランド人やピューリタン以外の異教徒達がアメリカへ移住していき、イギリス、フランス、スペイン、メキシコから購入、あるいは獲得した土地へ定住していきました。いわゆる西部開拓です。イギリスでは蒸気機関、自動織機が発明され、手織りは衰退し、大工場が建設され、新たに産業資本家が台頭して来しました。

以上が「サイラス マーナー」の書かれた前後の大まかな国内、国際情勢ですが、これらを見ますと、「サイラス マーナー」はいろいろな角度から読み取れます。

国教会派は教会（チャーチ）へ、非国教会派は各会派の礼拝堂（チャペル）へ行っていましたから、ユダヤ人のマーナーを含むランタンヤードの人々はカソリック系の再洗礼会派（彼らは成人後に洗礼を受けていた）と思われ、ドーリーウインスロップ夫人を含めたラブローの人達はピューリタンで、彼女の言葉にピューリタンの特徴が出ています。

そしてカトリック教徒がピューリタンへ変わって行く課程がわかります。さらに、作者は大地主の没落を言いたいのかも知れません。あるいは、人の絆の大切さが言いたいのかも知れません。

私は始め、何気なく読んでいましたが、どんどん惹き入れら

れていき、本気で翻訳してみようという気になりました。翻訳を終えて、とても150年前に書かれたとは思えません。

それは時代も国も違いますが、人間の本質が描かれているように思います。そしていろいろな人の口を使って言っている言葉はなにか格言じみた重みを感じます。情景と、心理描写は実に巧みで、まるでアニメか劇画を想像させますが、劇作家のヘンリー・ルースの手ほどきを受けたのでは、と思います。

翻訳にあたり、なるべく解り易く、読みやすいようにつとめました。そして、直訳すると日本語として不明瞭な部分は私流に、本文の意を汲んで意識しましたので、原文と読み比べていただければ、より理解して頂けると思います。

(平成17年5月)

※ ランタンヤード・・・ 地名

※ ドーリーウィンスロップ夫人・・・ 親切なラブローの婦人

※ ラブロー・・・ 地名



## 翻訳原本について (編集者注)

ここに所収した「サイラス マーナー物語」の日本語訳は橘 一男さんが平成十七年の三月から四月にかけて、わずか一月半という短い期間で翻訳を仕上げた、まさに脅威の作品です。

原本となった本は「SILAS MARNER」(An

Adapted classic/Globe Fearon Educational Publisher

1998) これは英語学習の副読本用にアメリカの教化書出版社が原書の改訂版として出版したものです。原書より言葉を修正し、多くの文章と段節を短くし、単純化したと英語版の編集者が述べていますがそれでも100ページ近くある本です。原本の行間・余白には鉛筆や赤ペンでぎっしり書き込みがあり、苦心の跡がみられます。巻末の数ページは読者がどのくらい理解できたかをチェックするための60個の設問があります。この付録部分についても橘さんは全問に解答を書き込んでいます。才能の豊かさと集中力に感心すると共にまじめな性格に改めて感服しました。

なお、原書の日本語訳は岩波文庫から土井治訳があります。が、当改訂版の日本語訳は出版されていません。

## 編集者より

橘 もっちゃんの病状を詳しく知ったのは、平成十六年五月、Eちゃん、S・Cさん、Y・Kさんと一緒に練馬のお宅に招かれた折のことです。

おりユさんの心づくしの、初夏の味わいあふれる手料理のおもてなし、みなにぎやかに談笑。病人とは思えぬ活さで支極機嫌のいい橘もっちゃんが「これ、読んで」と無造作にテーブルの上に差し出した一枚の紙がありました。

広告チラシの裏に手書きでなにやらギッシリ書かれている。「吾輩ハ癌でアル」とある。日常目にしない漢字とカタカナの文章は読みにくい。しかしきわめて明快な、短い言い切り型の文章は、少しお酒の回り始めた頭にもはつきりと飛び込んできた。癌を茶化し、擬人化し、ガンになりきった「吾輩」が語っている。肝臓ガンに変身していることもさり気なく語っている。心臓はドキンと鳴ったが、私から出た言葉は「おもしろい！」になってしまった。

「橘もっちゃん、文章うまいね。おもしろい!」「はっはっ、これ病院で書いて看護師さんに見せたら、おもしろいと言われたよ」と愉快そう。「いいじゃない。なかなか書けないよ。こういうふうには」。いろいろ考えこんだに違いない深刻な自分の病気をこのようなたちで表現する度量と文章力の両方を讃えたつもりだった。見れば彼の背後にある本棚には常用日記が何年分も並んでいる。書く習慣があることがわかる。なるほどと思った。

それから数日後、原稿用紙に筆ペンで清書した『吾輩ハ癌デアル』と新たに「白侘助」が送られてきた。そして一ヶ月位のうちに「花菖蒲園」、官能小説風に書いてみたという「危ないゲーム」、抗ガン剤治療の再開前にと、紀行文「御坂峠から黒岳へ」。

彼は筆が早い。苦もなく書ける様子。無理して書くとうしても冗長で無駄な装飾的文章になったりするものだがそれが無い。地で書けるらしい。闘病しながらの執筆、書くことに集中しているときは楽しい時間であるようだ。洒落で自らつけた戒名が「庭球登山物書居士」。

ここに掲載したすべてがその後一年間に書き下ろされたものである。分野は多岐にわたり、よく下調べもしている。

「サイラス マーナー物語」は病院帰りに神田の古本屋で買った英語の原書を、面白い、楽しいといいながら翻訳をしたという。こんな才能があったのかと驚かされる。

当初私は、神宮クラブ内のコミュニティ紙を発行し、そこに掲載しようと思っていた。「昭和ひとけた会」がテニス交流だけでなく文芸誌を発行しているのを見て、次の世代―終戦前後の私たち世代も何か始めようと思ったのである。メイライターでたのむわと言ったら彼は快諾し。ペンネームまで用意した。「橘もっちゃんの作品だけで一冊の本ができる」と言ったら、「本にしたいね。みんなに読んでもらいたい。そして感想をききたい」とも。

橘もっちゃん、生きている間にこの「ごぜんたちばな著作集」を売ることが出来なくてごめんさい。

遺稿集となることをあなたも暗黙に了承しながら、原稿を送って来ていましたよね。私は延ばし延ばしが命を延ばすことになるのではないかと少しは期待をしていたのです。

御前 真澄

あとがき

橘 一男と親しく交際つきあひ始めたのはM石油子会社のM石油産業に

出向した昭和56年4月からである。橘はその時、関東支店販売課に所属していた。栗栖は橘の仕事を引き継ぎ橘は新製品の開発に携わる販売企画部に転属した。

当時からつい最近まで国内石油会社はメジャーといわれる国際石油資本に猛攻撃を受けて熾烈なシェア争いをしていった。

M石油は優秀な社員を多く抱えていたにもかかわらず組織や体制の不備から最も苦戦を強いられていた石油会社だった。このような状況下でM石油のスリム化を図り体制を立て直すため次々に子会社が生まれ我々中堅層は出向して行った。

小説の中では「酒を飲んだ」「テニスやゴルフをした」「山菜取りに行った」と楽しいことばかり書いているが親会社と異なり「やれピンはね会社だの、他人のフンドシで相撲を取っているのだ」とのしられ、たいへんな辛酸を舐めた。特に親会社に残った連中は冷

たかった。引継ぎで関東一円の特約店、代理店を巡ったとき新進気鋭の中間管理職であった二人は毎晩ホテルに戻ると今の会社が社会的に認められ一本立ちするためにはどうしたらよいか激論を交わした。

橘は現在でもCT&S(株)において大きな利益源となっている商品の開発中心人物である。

栗栖は二級整備士や三級整備士を教えていたトレセンインストラクター、特約店出向の経験を生かし支店販売課で抜群の成績を収め昭和62年12月海外研修の榮譽に輝いた。

大きな波のうねりには勝てずM石油はD石油と合併して

C石油に生まれ変わりM石油産業もCT&S(株)という商事会社となり今日にいたっている。

定年間際又宿命的に橘とCペトロテック(株)で一緒に仕事をすることとなり後は小説通りの筋書きとなった。

栗栖は学校教育よりも企業教育によって育て上げられた人間である。そういう理由からM石油、C石油で机を並べた橘はじめ多くの先輩・同僚・後輩にお礼をいいたい。

特に入社当時から今日に至るまで温かく見守っていただきご指導してくださった横浜市のM・R氏にこの場を借りて感謝とお礼の言葉を申し上げます。

平成十八年十月三十日 栗栖 靖